

琉球大学学術リポジトリ

琉球大学～教育熱心な教員集団：
全国調査から見たもの

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西本, 裕輝, Nishimoto, Hiroki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42035

琉球大学～教育熱心な教員集団

－全国調査から見たもの－

大学教育センター

西本裕輝

はじめに

近年、大学を取り巻く状況はより厳しさを増している。特に国立大学法人が誕生して以降、FD活動、第三者評価・外部評価のより一層の強化が求められている。本学においてこのような動きに対応するための全学的なFDを推進する部局は、今のところ大学教育センターである。このような状況に対応するため、大学教育センターでは毎年、FD活動推進のため数々の講演会を実施してきた。また、来年度は、これもFD活動の一環であるが、プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーという表彰制度も導入する計画もある。

こうした状況もふまえて、本報告では、全国調査のデータをもとに、他大学と比較したうえでの本学のFD活動の進捗状況について検討してみたい。

調査データとは、広島大学高等教育研究開発センター長である有本章教授を代表とするプロジェクト「大学におけるFD・SD（教員職員資質開発）制度化と質的保証に関する総合的研究」（科学研究費補助金・基盤研究A：平成14年～16年、課題番号14201028）の調査により得られたものである。本プロジェクトでは、2003年5月～6月にかけて、全国の20の国立大学（当時）の教員4963名を対象としたFD活動に関する調査を行った。有効回収数は1782名（回収率35.9%）であった。もちろん琉球大学も調査に参加しており、回収数は55名（回収率38.7%）であった。調査に協力した20大学とは北から、北海道大学、東北大学、茨城大学、筑波大学、東京大学、新潟大学、信州大学、名古屋大学、京都大学、神戸大学、鳥取大学、広島大学、山口大学、香川大学、愛媛大学、福岡教育大学、九州大学、長崎大学、熊本大学、琉球大学であり、我が国の国立大学法人の主要な大学

はほぼ含まれていると言ってよいだろう。

私は本プロジェクトの分析に関わる中で、このような全国調査の必要性を痛感した。先ほども少しふれたが、今後、認証評価機関による第三者評価が次々に入ってくるのが予想される。そうした際、各大学はデータを示すことによってそれぞれの実践がいかに優れたものであるかをアピールしなければならない。例えば、授業評価の満足度得点の結果を示すことによって、どれくらいの教育効果が上がっているかをアピールする、といった方法である。

しかしながら、それはあくまでも大学ごとに閉じた評価であり、絶対評価である。つまり、例えば、授業評価により琉球大学の学生の50%が講義に満足しているという結果が得られたとしても、それはどの程度優れたことなのかどうか判断が難しい。50%も満足しているのだからよしとしようという考えもあるだろうし、50%しか満足していないのだからさらなる努力が必要だという見解もあるだろう。しかしここで、全国の大学の満足度の平均が45%であるというデータがあったとするならば、琉球大学は相対的に高い満足度を得ているということが客観的に示せる。

つまりこうした全国規模の調査により、絶対評価だけではなく相対評価で本学がどの程度優れているかを知るきっかけとなるのである。

ここではそうしたことを念頭に置きながら、データ分析を行いたい。

調査から明らかになった本学の特徴

①授業の自己評価と授業の学生評価

まず、教員自身が判断した「授業の自己評価」について見てみたい。具体的には「担当授業科目はうまくいった」という質問に対して、「うまく

いった」～「うまくいかなかった」の5段階で尋ねている。評価が高いほど数値が高くなる。

その得点(素点)を各大学の平均値の高い順に並べたものを表1の左側に示した。なお、他の大学の具体的な名前は示さず、ID番号で表示する。

幸い、琉球大学は20大学中1位である。つまり、20の調査参加大学中、もっとも教員による授業の自己評価が高いということである。

また、「学生による授業評価」で高い評価を得たかどうかを尋ねた質問についてである。具体的には、学生による「授業評価で高い評価を得た」かどうかを5段階で尋ねており、同様に、評価が高いほど数値が高くなるよう処理している。結果は表では右側に示した。これも比較的高く、参加大学中2位である。

これらの結果からわかることは、楽観的なものかもしれないが、教員から見ても学生から見ても、琉球大学の授業は、比較的うまくいっているということである。授業評価が始まって10年経ち、それなりに授業改善に結びつき、根付いていると言えるのではないだろうか。

表1) 大学別の授業に対する評価の平均値比較

授業の自己評価(素点)			授業の学生評価(素点)			
大学名	度数	平均値	大学名	度数	平均値	
琉球大学	54	4.09		81	10	4.20
63	95	4.05	琉球大学	48	4.04	
81	23	4.04	17	68	3.96	
49	100	4.01	22	97	3.95	
72	105	4.00	72	91	3.91	
82	104	3.98	56	45	3.89	
10	89	3.98	68	46	3.85	
87	69	3.97	82	77	3.83	
68	51	3.96	49	58	3.79	
22	120	3.96	78	46	3.78	
76	44	3.95	76	18	3.78	
1	105	3.94	63	78	3.76	
17	143	3.94	73	78	3.71	
88	62	3.92	10	71	3.70	
56	111	3.92	88	40	3.70	
45	77	3.91	45	73	3.66	
35	114	3.89	15	57	3.65	
78	61	3.89	35	92	3.64	
73	86	3.87	1	88	3.61	
15	74	3.85	87	62	3.52	
合計	1687	3.95	合計	1243	3.77	

②教育熱心な教員集団

次に、そもそもこのように比較的授業がうまくいっている要因についてデータを手がかりに考えてみたい。先ほどまでのデータは、初歩的な統計分析であったが、ここからは複数の変数を使用して、因子分析等の手法を用いて分析を行いたい。質問で、授業の質の向上のための条件について尋ねている項目がある。ここではその質問から、琉球大学の教員の教育熱心度について考察したい。

項目を使用して因子分析を行った結果が次の表2である。分析では5つの因子を抽出した。そしてそれぞれ「教員の熱心さ」「学生の学習支援」「教員の資質・工夫」「目標の設定」「国際性」と命名した。これらの項目はすべて教員の熱心さに関わるものであるが、もっとも寄与率と固有値の高かった因子1に代表させた。以降の分析には因子1の因子得点を使用する。

因子1「教員の熱心さ」の因子得点を分散分析によって大学ごとに比較したのが表3に示した結果である(1%水準で有意)。この結果から、琉球大学の教員は調査校中もっとも熱心であると解釈することができる。熱心さを示す因子得点は調査校中もっとも高い。つまり、授業の成功を支えているのは、こうした教員の熱心さであると思われる。

ただし、この結果により、即、琉球大学のFDが成功していると言うことはできないと思われる。例えば、本学においてFD活動を推進する際に中心的な役割を果たすべきは大学教育センターであろうが、専任教員の少なさもあり(本学1名、他大学でFDを担当する大学教育センター等の専任教員は最低でも4名。中には本学と同じ規模の大学でも20名近い専任教員を擁しているところもある)、他大学と比較するとFD活動は必ずしも活発であるとは言えない。

表2) 授業の質の向上のための条件の因子分析結果(バリマックス回転)

	成 分				
	教員の熱心さ	学生の学修支援	教員の資質・工夫	目標の設定	国際性
教員が学生の成長発達に関心を持つ	.663	.088	.152	.104	.054
教員が学生をほめるよう努力する	.639	.018	.038	.156	.216
教員が学生の授業参加を促す	.609	.073	.070	.142	.105
受講学生が熱心に学習する	.577	.202	.298	-.243	.071
教員が学生の質問や意見に関心を持つ	.560	.110	.303	.261	-.097
少人数で教育を行う	.405	.361	.050	-.181	.297
授業でオフィスアワーを設ける	.390	.373	-.116	.143	.315
厳格な成績評価を行う	.310	.211	-.027	.273	.266
教育施設・設備が充実している	.027	.833	.159	.120	.042
学生の学習施設・設備が充実している	.045	.801	.148	.064	.006
受講学生の学習活動が組織的に支援されている	.263	.688	.043	-.061	.301
TAを活用する	.278	.460	.010	-.009	.338
視聴覚機器を有効に活用する	.074	.448	.236	.261	.196
教員が豊富な知識を持っている	.099	.123	.781	.116	.113
教員が優れた研究力を持っている	.008	.000	.713	.046	.251
教員が授業の準備を周到に行う	.321	.239	.598	.289	-.115
教員が授業内容を工夫する	.398	.260	.571	.333	-.147
教員が効果的な講義方法を工夫する	.342	.379	.389	.298	.025
授業のシラバスを学生に提示する	.061	.118	.086	.695	.067
担当授業の目的・目標をふまえた授業内容とする	.173	.029	.336	.630	.026
「学部・学科」の教育目的をふまえて授業を行う	.117	-.006	.187	.597	.207
教員が学生による授業評価結果を参考にして授業改善に努める	.404	.331	-.066	.424	-.022
英語を使って授業をする	.080	.154	.106	.108	.794
国際的に標準とされるテキストを使って授業をする	.085	.140	.087	.173	.778
受講学生が豊富な知識を持っている	.326	.110	.238	-.349	.401

因子抽出法：主成分分析

表3) 教員の熱心さの平均値比較

授業の自己評価(素点)		
大学名	度数	平均値
琉球大学	49	0.40
45	73	0.22
73	82	0.21
81	25	0.17
15	70	0.13
1	97	0.12
68	46	0.11
78	58	0.10
17	130	0.05
56	9	0.01
63	88	0.00
82	96	-0.02
87	67	-0.03
22	106	-0.08
72	98	-0.09
88	59	-0.15
35	109	-0.18
76	42	-0.19
49	87	-0.22
10	75	-0.26
合計	1556	-0.00

おわりに

ではなぜ、比較的熱心な教員集団が揃い、授業が成功しているように見えるのであろうか。私は琉球大学の持つ特殊な状況が関係していると考え

ている。

琉球大学はアメリカ型の大学として出発した。そして教員の中には米留経験者が極めて多い。そうした背景から、日本でFDという言葉が定着する以前からすでに、ある程度の共通認識があった。そのことによって、比較的早くからセンターの設置や授業評価の実施がなされてきたと思われる。脆弱なセンターでもなんとかやっつけていけるのは、そうしたいわば「貯金」のようなものがあったからであると思われる。

しかしだからと言って、今後も脆弱なセンターのままでよいということにはならない。大学間の競争が激しくなる中、その貯金の残高も減りつつあるように感じる。そのためには、一刻も早く、大学教育センターに多くの専任教員を配置し、組織力と企画力をもって、FDの活性化をはからなければならない。

※ 本分析にあたりデータの使用を許可していた

だいた有本章教授(広島大学高等教育研究開発
センター長)に感謝いたします。